

ホームページを利用した図書館概論の試み

石 橋 民 生

Introducing libraries using their home pages

Tamio Ishibashi

は じ め に

図書館概論という科目について、どんな内容を、どのような方法でつたえるか、目的をどこにおくか、といったようなことをすこし考えてみたい。というのも、普通に想定される講義方法、つまり、通常のテキストを用いて、それを章別に要約してゆくという方法での講義に、いくらか疑問を感じるからである。その疑問とは、このような方法では、法令で規定されている図書館概論の内容を適切に伝えられないのではないか、ということである。どこからこのような疑問が生じてくるのだろうか。ひとつの理由は、テキストそのものの構成の仕方にあると思う。それで、この点をすこし検討してみたい。また、通常のテキストを用いることに対する疑問から、少し趣向を変えて、各種類の図書館や書誌ユーティリティのホームページを解説するという方法で、図書館概論を講義するという実験を行なってみた。その要約を述べて、その有効性及反省点などを考えてみたい。この実験は、法令に規定されている図書館概論の内容を、どうすれば効果的に学生につたえられるか、考えた挙句の試みである。図書館情報学（この名称も、今日ではやや古臭く感じられるが）も、情報学というより大きなフレームのなかで再検討されなければならない時期にきていると考えられるが、この実験も、そのような方向性に沿ったひとつの試みである。

1 図書館概論に求められる知識

(1) 法令の規定

図書館概論に求められる知識とは、どのようなものであろうか。図書館概論の科目の「ねらい」と「内容」については、法令に規定がある。⁽¹⁾

ねらい

図書館の意義、図書館の種類、図書館の機能・課題・動向、図書館政策、関係法規、図書館と関係機関等との関係について解説する

内 容

- ① 図書館の意義（生涯学習と図書館、社会の変化と図書館を含む）
- ② 図書館の種類
- ③ 図書館の機能と課題（館種別）
- ④ 図書館の動向（図書館の現状と歴史、情報技術の図書館への影響、外国の図書館事情を含む）
- ⑤ 図書館行政（図書館政策、図書館法、社会教育法、地方自治法、著作権法等を含む）

- ⑥ 他の図書館及び類縁機関等との関係（図書館相互協力・ネットワークを含む）
- ⑦ 図書館の自由，図書館関係団体等

つまり図書館概論の目的は、図書館の意義、種類、機能、課題、動向などについて「解説」し、理解させることである。図書館に限らず、特定の社会組織（図書館も社会的分業の一形態である）を解説し理解させるためには、意義、種類、機能、課題、動向などの諸側面をとりあげることになるのは当然である。では、このような手順で解説されることによって伝えられる知識とは、どのようなものであろうか。

(2) 「図書館概論」の知識内容について

このことを考察するために、図書館司書として十分経験をつんだ職員における知識というものを考えてみる。図書館概論に相当するような知識は、ベテランの図書館職員において、どのように形成されるのだろうか。

ベテラン図書館員とは、たとえば、図書館で10年程度の勤務経験を有していること、また、その経験のなかには、整理およびサービスそれぞれの部門での、複数の業務経験（整理部門では受入と目録、サービス部門ではレファレンスと貸出といったような）が含まれている、といった実務経験をもつ図書館職員を想定する。このような職員の知識とは、図書館のことならだいたいわかる、といったような知識、ほかの業界でも体得されと思われるような、知識である。それは、図書館概論によって秩序づけられ、体系化されたものではないが、図書館概論の実体を形成するような知識である。

図書館で職務を経験するとき、たとえばサービス係に配属されたとする。サービス係で2、3年働けば、係の仕事はだいたい覚える。しかし、この新人職員は、図書館のほかの係（整理部門やレファレンス）のことは、ほとんど知らないであろう。彼（女）が知ることできる、サービス以外の業務の知識は、同じ図書館で働いていることから得られるものである。それは、図書館業務全体の関連をとおして、得られるものである。たとえば、サービス係員として仕事をするためには、分類についての知識もある程度覚えざるをえないし、利用者をレファレンスに回すためには、レファレンス係でおおよそどんな業務が行なわれているか、知っている必要がある、といった知識である。しかし、だからといって、彼（女）は、目録やレファレンスの業務内容に通じているということとはできない。これらの、サービス係以外の係の仕事については、だいたいにおいてどんなことをやっているんだという、漠然とした印象程度のものであろう。それは、図書館で働いた経験のない一般市民と、それほど大きな違いはないであろう。

整理部門とサービス部門のいくつかの係を経験することによってはじめて、この職員は図書館の全体的な構造について理解することができであろう。このように、相当規模の図書館ではたらく場合は、図書館員としての専門性（ここでは、この専門性という用語について、図書館業務全体の構造的理解をもつ、という意味に使用する）を身につけるためには、おそらく10年程度の経験、それも、整理部門とサービス部門それぞれの部門で複数の係を経験するといったキャリアが必要になるといえる（仮に、上級司書としておく）。

小規模な図書館で働く場合は、必然的に複数の職務をこなさなければならないので、図書館の全体像についてのイメージは、比較的短期間で形成されるであろう。しかし、この場合には、当然ながら、各分野の知識はひとつとりのものであり、専門性の水準は低いものとならざるをえない。

上級司書が長年の仕事の結果身につけるところの、図書館全般についての知識（当人には、

知識大系としては意識されていないことが多い)は、個々の専門的業務の知識の積み重ねのうえに形成される、図書館というものについての理解である。それは、業務の上の知識だけでなく、研修などによって付加されるものも含まれる。行政全般、法体系、図書館界全体の仕組みや動向などの知識も入るであろう。年令を重ねることで得られる、人間性にたいする理解の深まりもあろう。このようにして、彼(女)は、10年程度の図書館員としての経験を通じて、図書館概論でいうところの、図書館の意義、機能、種類、課題、動向などについて、簡単な説明ができるような、奥行きのある全体的知識を獲得するものと想定することができる。このような知識は、ひとつの職業を長年経験することから得られるところの、その職業を通じて獲得した社会理解、世界観、人生観であろう。

図書館概論によって、初学者に与えられるべきものは、このような上級司書の知識そのものではない。それは無理というものである。そうではなくて、上級司書の全体的な図書館理解から、業務で得られた知識を差し引いたもの、いわば全体的図書館理解のイメージであると考えすることはできないであろうか。ほかの社会組織と区別されるところの、図書館の活動内容、社会的編成、歴史などについての概観的イメージ、それが図書館概論のめざすものであると、ひとまず考えておくことにする。

それは、いわば、未知の場所へ旅行するというときの、ガイドブックのような役割である。その土地、交通手段、景観、予想される障害、などについての意識(イメージ)である。それはまだ知識ではない。なぜなら、意識が知識化するのに必要な試練を経ていないからである。しかし、無知に比較すれば、その優位はあきらかである。

もし仮に、上級司書が図書館概論を学べば、自分の(経験を中心としたそれまでの)知識を関連づけたり、より広い視野のもとに置いたり、法的枠組みを理解したり、などの利益を得ることができるであろう。学生は、図書館概論によって、図書館全体についての抽象的(というのは、実務経験の裏付けがないので)なイメージを与えられるであろう。

2 教科書を用いた図書館概論

法令の内容に沿って、章別に編集された教科書の問題点とは、生きた図書館活動の具体的なイメージが描けない、という点にある。これには主に二つの原因がある。一つはテキストの編集上の構成そのものであり、一つは、読者が図書館について基礎知識をもっていないということにたいする教育的配慮が欠落していることである。

以下、この節では、テキストの構成上みられる問題点について考察し、図書館の基礎知識については、次節で述べる。

法令のねらいと内容は、図書館概論で解説すべき主題を規定している。しかし、これは、テキストの編成そのものを規定しているわけではあるまい。しかし、現実には、法令の規定に沿って、テキストの章別編成が行なわれている。

テキストの編制が、法令の規定に沿って行なわれるということについては、当然ながら、法令による規制そのものが必要であるということがある。図書館学の各科目の内容について、大略を規定しておくことは、テキストや講義の内容そのものを法定することであり、逸脱を認めないことである。このような規定が存在しないと、講義の内容は、教師に一任され、いわばどのような内容でもかまわないということになり、一定の水準を維持することはできないであらう。

う。

他方、少数（1人ないし2人）の著者により、独自の視点から構想され、法令に規定された内容を含むテキストというものは、望ましいものではあり、一部公表されているものもあるが、多くの科目に出揃ったというわけでもなく、容易に想像されることだが、なかなか執筆は困難である。したがって、今日では、まだ依然として、法令の内容に沿った編制をもつテキストが多いという状況にあるわけである。

このようなテキストには、いくつか問題点を指摘することができると思う。

(1) 主題の提示

特定のテーマについて、説明するときに、よく用いられるのは、そのテーマについて通常解説される論点、箇条書きで提示される方法である。たとえば国会図書館をみてみよう。国会図書館の意義、役割について、つぎのようなことがらととりあげられる。⁽²⁾

- ① 文献センターとしての機能
- ② 書誌および情報センターとしての機能
- ③ 貸出・複写センターとしての機能
- ④ 国内協力における機能
- ⑤ 国際協力における機能

これらのことがらは、もちろん事実である。しかも、どうしても伝える必要のあることである。そのかぎりにおいて、話題の選択にまちがいはない。

では、なにが問題なのか。これでは学生が十分理解できないということが問題である。なぜ理解できないのだろうか。こういう項目の提示と説明で、国会図書館の役割を理解できるのは、図書館のことがある程度分かっているひとに限られるからである。これらの機能は、いわば、身辺のありふれた図書館活動の国家的展開であるといえる。普通の図書館が図書を収集するように、国会図書館も図書を収集する。ただし、国家的規模で。普通の図書館が目録をつくるように、国会図書館も目録をつくる。ただし、ジャパン・マークという形で、などなど。国会図書館のこのような機能の理解は、普通の図書館の同様の機能が分かっているひとには、理解できようが、そうでない学生にとっては、困難である。一般の図書館活動との関連性が理解できれば、国会図書館の意義の理解は容易なものとなるであろうが、しかし、この関連性を抜いて、国会図書館の機能を箇条書に並べられても、なかなか理解することはむずかしい。

問題は、このような説明方法が、テキストの編成方法そのものから出てきているということである。編集会議において決定された項目を担当する執筆者としては、どうしてもこのような説明のスタイルになってしまうのである。このような傾向は、部分的な記述に言えるだけでなく、テキストの全体に及ぶことになる。

(2) 抽象的な説明

したがって、主題の提示そのものが抽象的であるので、説明のやり方も抽象的にならざるをえない。たとえば図書館の「意義」について見てみよう。テキストでは、普通、図書館法とか用語辞典の解説が紹介される。図書館法における図書館とは「図書、記録、その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設で、地方公共団体、日本赤十字社又は民法（明治29年法律第89号）第34条の法人が設置するもの（学校に附属する図書室、又は図書館を除く）をいう」。⁽³⁾ これは、図書館の法的定義であって、たとえばある図書館の建設計画にたいして、補助金の交付が検討される場合などに、その図書館がはたして法の規定に沿ったものであるかど

うか判断が必要になるときに、必要になるものである。ほかの社会組織と区別される図書館の固有の活動内容を理解するには、これでは不十分である。

また、国会図書館の説明では、「意義」、「機能」、「活動と課題」という分け方で、「機能」については上述のように項目が並べられており、「活動と課題」については、各国の国会図書館の歴史的概説が行なわれている。しかしこれもやはり学生には理解できない。各国の中央図書館の歴史は、それはそれで重要であるが、問題なのは、現代の活動や課題の具体的な理解である。各国で状況が異なるので、それぞれ詳細な解説が必要となるし、概論のテキストにそこまで求めることは困難であるが、説明されなければいけないのは、さきの機能が行なわれている実際の活動状況、その国のなかで果たしている役割の解説である。たんに略史を述べることと、中央図書館機能の具体的な状況を述べることは、同じではないはずである。

(3) 重複など

たとえば、意義、役割、活動内容…などというとき、ひとはその個々の内容を、ほかと区別しながら、明確に説明することができるであろうか。なぜ、このような叙述の様式がでてくるのか。それは、最初に、意義とか役割とか機能とか活動内容という、いわばお題目があって、それに叙述をあわせているからである。説明すべき内容がさきに存在して、それから叙述の様式を考えるのなら、叙述は分かりやすいものになる。しかし、お題目がさきにあって、それに叙述をあわせていくことになると、そのお題目が似通ったものであれば、お題目にあわせて内容を分割しなければならないし、異なるお題目で同じことを説明しているといわれては困るので、叙述に表現上の変化をもたせないといけない。しかし、こうして苦心して作成された説明が、はたしてわかりよいものになるであろうか。国会図書館の説明を、意義、機能、活動内容などに分割して、わかりやすい解説ができるものだろうか。意義と機能の相違とか、機能と活動内容の区別とかに苦心して叙述しようとするれば、それだけで、分かりにくい説明になることは明らかではあるまいか。各項目の叙述中の避けがたい重複、表現上の苦慮などに神経をつかうことは、必然的にわかりにくい叙述という結果をもたらす。たとえば、図書館資料論の「コレクション構築に影響を与える諸要因」と「資料選択の基準」である諸要因の類似性などを参照されたい。⁽⁴⁾ コレクションに影響する要因と、収集すべき資料の決定に影響を与える要因と、この二つのことがらをこんなふうに分けて説明すべきであろうか。

ベテラン職員に対して、図書館概論を講義するのであれば、このような方法でも、一定の成果を期待することができよう。この人達は、図書館がどんなところか、基本的な知識をもっているからである。しかし、図書館をすこしは利用した経験はあるものの、それ以上の知識はない学生や一般市民にたいしては、まえもって、図書館についての基本知識をつたえておく必要があるのではなかろうか。その場合、図書館の基本知識とは、どのようなものであろうか。

3 図書館の基礎知識

それはまず、ほとんどの図書館に共通することがらであること、さらに、それを知っていれば図書館を効果的に利用することができること、そんなことになるであろう。私は、以下の3点が説明されるべきであると考える。

(1) サービスの種類

まず、図書館の主なサービスは、貸出、レファレンス、相互利用の3つであるということである。この3つのサービス以外にも、図書館は各種のサービスを行なっている。読書やストー

リーティング、施設の提供、などである。しかし、図書館の主要なサービスを挙げよというときに、上記の3つを外すことはできないであろう。図書館は、資料を集め、利用者に貸出し、さまざまな質問に応えるための体制をととのえ、もし利用者に必要な資料がその図書館にない場合には、ネットワークを駆使してその資料を入手するように努める。職員の労働の主な部分は、直接的にか間接的にか、この3つのサービスにかかわっている。しかし、学生や一般市民は、そのように認識しているであろうかと考えてみると、かならずしもそうではないように思われる。かれらは、貸出についてさえ、図書館は本をただで貸してくれるところというだけで、このサービスは図書館のサービスの柱のひとつであるという認識はないといえるのではないか。まして、レファレンスといい、相互利用といっても、理解できるのは実際にそのサービスを体験したことのあるひとだけで、それ以外のひとにとっては、ことばさえ理解できないというのが大半であろう。

(2) 目録システム

これは、図書館の資料と利用者を結びつけるシステムである。一般の書店では、利用可能なスペースに、利用者がアクセスしやすいように、また書店側で管理しやすいように、本や雑誌を所狭しと並べている。大型書店では、店にある本は端末で調べることができるが、しかし、その場所は店員に案内してもらわないとわからない。端末以外の検索手段といえば、歴史とかコンピュータとかの大項目による分類、一般図書と文庫新書の別、著者の見出しなどがあるくらいである。

図書館では、所蔵するすべての資料について、目録が整備されている。目録の調べ方が分からなくても、図書を閲覧し借りることはできるが、どんな資料が所蔵されており、どこに配架されているか、といった、ある程度意識的な利用ということになると、目録の引き方、OPACの検索についての知識が必要になる。また、今日では多くの図書館で遡及入力がすすんできたので、OPACを調べればだいたい間に合う図書館が増えてきたとはいえるものの、依然として多くの図書館にカード目録が置かれており、古い本はカードも引いてみる必要がある。OPACとカードを利用すれば、必要な資料を検索し、アクセスできるということ、ほとんどの図書館がそのシステムを採用しているということを知っていれば、すくなくともその図書館に所蔵する資料については利用できる。

また、WEBCATを利用すれば、全国の大学図書館の所蔵資料を検索することができるし、雑誌記事索引も、国会図書館のHPから検索できるようになった。市販の図書についてはインターネットにサイトがある。図書館の目録に加えて、これらの検索を利用することができれば、卒業論文レベルまでの資料集めならひととおり対応できるであろう。

(3) 資料の配架法

図書館のなかで、資料がどのように配置されているか、この点を知っておくことも、図書館の基本知識の一部を構成する。図書館のサービス内容を知り、目録の検索を知っていても、実際に図書館資料がどのように配置されているかを知らなければ、図書館を十分利用することはできない。

図書館における資料の配架法を知るためには、いくつかのポイントを押さえるだけで十分である。開架図書の一般開架と参考図書への分割、一般開架図書の配列法（文庫の別配置などを含む）、逐次刊行物の配架方法（新着とバックナンバー）、新聞の利用法などである。これらのことは、図書館員にとっては、日常的な活動環境ともいえるものであって、いまさら説明の必要はないが、利用者にとっては、かならずしもそうではない。一般の利用者は、そこまで知らずとも、ひととおり図書館を利用することはできるので、それで十分である。しかし、司書課

程の学生にとっては、知らないではすまされないことである。図書館概論のテキストを見ても、出ていないことが多い。

(4) 用語集

学生たちにとっては、図書館概論で出てくる専門用語は、きわめて分かりにくいものである。これまた、図書館員にとってはお馴染みの用語である。たとえば、書誌、目録、データベース、などなど、あげていけばきりが無い。しかし、これらの用語は、その理解なしには先に進むことのできないものであり、図書館学を学ぶ過程の最初の部分で、説明される必要がある。厳密に定義された用語集であってもよいが、ある程度厳密さを犠牲にしても、直感的に理解できるようなやりかたで説明される方がよい。各科目の中で専門用語が解説されるのは当然であるが、図書館概論においても、種類や課題、動向の解説に進むまえに、この分野の簡単な用語集が準備されなければならない。

講義と見学などによって、以上述べた事柄が学生に十分理解されれば、学生は図書館について、基本知識をもったといえるのではあるまいか。受入とか目録など、伝えられていない知識もたくさんあるが、およそ図書館とはどういうものであるかということについての、具体的で構造的なイメージを得ることができるのではあるまいか。このような基本知識の習得は、図書館概論の内容そのものを理解する上で必要であるだけでなく、今後のより専門的な科目に進んだときに、各科目の位置付けを理解する上でも役立つのではあるまいか。

4 HP を利用した図書館概論

採用した図書館は、広島文教女子大学、広島県立図書館、広島市立図書館、国会図書館であるが、あと、書誌ユーティリティとして国立情報学研究所をとりあげた。HP 全体を資料にするのもあまり量が大きくなるので、それぞれの機関の HP を約 1/2 程度に編集して講義材料とした。

(1) 広島文教女子大学

学生たちが日常利用する図書館を、まずとりあげた。ここでは、前述の図書館の基本知識を解説することを主な目的とした。日常使う図書館の理解をつうじて、図書館という機関の概略を理解させるように努めた。

(2) 広島県立図書館

つぎに広島県立図書館をとりあげた。この図書館については、一公共図書館としての機能の説明と同時に、県立図書館としての機能が説明されなければいけない。県立図書館としての機能（県内各図書館の連絡調整、総合目録、相互利用サービス）については、図書館学の教科書では、普通、今後の図書館運動の柱のひとつと認識されている。ただ、実際問題としては、県立という従来の行政区分にこだわることに、どれだけの意味があるか、はなはだ疑問である。行政区分にこだわるよりも、国会図書館を中心としたネットワークの強化とか、大学図書館との連携の強化とかいったことに力をそそぐほうが、図書館運動としては、有効であるようにみえる。図書館の本来の性格からして、それは、地域的境界の打破をめざしているものである。県単位のたてわりの行政から、はたしてどれだけの利益がえられるか、非常に疑問である。広島県の場合、このような問題点がかなりはっきりうかがえる。実態としては、たんに市内の一公共図書館にすぎない県立図書館の、県単位でのネットワークという点からみたときの脆弱さ、また将来的発展の希望の無さ、を少しでも確認するように努めた。蔵書の量や質の点からして

も、県立図書館が真に相互協力の基地としての体制をととのえようと思えば、国立大学（ときまさに独立行政法人化のさなかにあるが）との、一本化を含む強力な協力体制の構築以外には考えにくい。

一方、一公共図書館としての機能については、OPAC の公開、読書運動、その他のサービスの説明を通じて、新しい市民サービスを展開する姿勢と同時に、依然として残されている保守的性格についても言及した。

(3) 広島市立図書館

広島市立図書館については、公共図書館のあらましをすでに県立図書館のところで述べているので、図書館サービスの部分は割愛し、沿革と将来計画の部分だけをとりあげた。将来計画については、現在、計画書が作成され、市民に公開されている。その中には、現在の市立図書館の抱えている問題や、その解決法が模索されており、また、当然ながら、将来の図書館サービス全体についても、言及されている。市立図書館の現状や問題点を理解する上でも、格好の資料である。それで、この計画書の説明を講義の一部にとりいれた。

また、同図書館の HP から、沿革を利用させていただいた。沿革は、戦後の日本の公共図書館の歴史の具体例であるということから、戦後公共図書館史の要約（葉袋秀樹作成）⁽⁵⁾ を参照しながら、広島市立図書館の戦後の展開を理解するように努めた。戦後の日本の公共図書館の歴史を、広島市立図書館の沿革のなかに、考えてみようとしたわけである。この方法は、どこの県立または市立図書館でも、有効であろうと思われる。というのも、どこの公共図書館も、戦後の図書館政策とか日本図書館協会の活動とかによって、影響を与えられ、指導されて、その運営方策を決定してきているからである。その結果として、今日の公共図書館があるわけである。こうして、将来計画と沿革によって、広島市立図書館の現状を理解しようとした。

(4) 国会図書館

国会図書館については、HP もさすがに奥が深いので、個々のサービスを細かく説明することはできないが、すでに述べたように、国会図書館も図書館の一種であること、ほかの図書館と異なるのは、サービスの対象（国会、図書館、国民、行政）、などであって、図書館としての基本機能（サービスの種類、目録の整備、図書と雑誌の整理）については、一般の図書館と同様であり、したがって、この基本機能の国家的規模での展開という視点から理解することが可能であることを示すように努めた。

(5) 国立情報学研究所

国立情報学研究所については、研究所の機能が書誌ユーティリティとしてのそれであることを説明するように努めた。HP のたくさんのメニューをみても、この組織の本質的な機能がどのようなものか、初学者には（一般市民にとっても）なかなか理解することはむずかしい。しかし、書誌ユーティリティであるという視点に立てば、この組織の機能を理解することは、やさしいものとなる。

書誌の蓄積および各図書館への提供（大学図書館を中心としたものではあるが）、総合目録の作成・維持、また、こうして形成されるネットワークを利用した ILL サービスの展開、などのことは、現代の図書館を語るうえで、特別の重要性を持つものである。ILL サービスの説明は、たとえば情報サービス概説の科目では、あまり詳しくとりあげられていない。それは、一般の図書館学のテキスト、たとえば資料組織論で、目録のネットワークが詳しくとりあげられていない（一部とりあげているテキストもある）のと、同様であり、どちらも、非常におかしなことである。学生にとっては、目録法の歴史的変遷も意味がなくはないであろうが、ネットワークによるコンピュータ目録の具体的な仕組みを学ぶ方がより重要である。ILL システムも、コ

ンピュータ目録のシステムも、それぞれ、資料組織論や情報サービス概説で、その具体的な仕組みが十分教育されなければならない。同様に、図書館概論においても、書誌ユーティリティという社会システムのもつ巨大な意義が、とりあげられなければならないのである。一般の図書館情報学のテキストで、これらの点が十分とりあげられていないのは、現実の図書館活動を理解するという、もっとも重要な点が軽視されているということになる。

たとえば、社会の情報化ということは、現代の図書館を考えるうえで、生涯学習とならんで、二つの大きな社会的背景という視点で、図書館概論でとりあげられるのであるが、やや抽象論になるきらいがある。現代の図書館と情報化ということを説明するのであれば、書誌ユーティリティの展開をとりあげるのが、おそらくもっとも適当であり、具体的でもあり、また説得力に富む話題であろう。図書館情報学のテキストでは、残念ながら、せいぜいひとつの話題としてとりあげられているだけなのである。

5 HP を用いることの意味

以上、HP を用いての図書館概論の試みは、この辺まで進んだところで半期の日程を終わってしまった。ほかにとりげたかった HP に、大規模大学図書館、学校図書館協議会、日本図書館協会などがある。それは将来の課題として、ここでは、ホームページを利用することの意味をすこしまとめておきたい。

(1) 具体的な図書館の広報（メッセージ）であること

民間企業と違って、公共機関の場合には、その活動内容、今後のサービス計画、努力の方向性などが、その実体はともかく、HP において、ほぼ網羅的に表現されているといえよう。初学者がこれをみると、その意味は十分理解されるとはいえない。それが図書館の HP であるからには、図書館というものはどんなものなのかということがひととおり分かっていないといけない。また、そのうえで、県立であるとか市立であるとかいう特性、現代の図書館の置かれた状況、などが反映されているので、そのあたりの読み解きも必要になる。これらのことは、講師が説明しないと理解できないことである。

(2) 装飾的要素

それとともに HP は、いわば外向けに化粧されたすがたである。具合の悪いところとか、予算逼迫の実情とか、たくさんの図書が紛失しているとか、図書館の自由問題でおなじみの不手際とか、そういったことはもちろん表面には出て来ない。この部分は、講師が補足して説明しなければならない。

(3) 一般性

HP といえば、もちろん、特定の図書館の HP である。HP を分析することで、その図書館のことは分かるとしても、はたして、それは、一般的な結論であると考えてもよいものだろうか。

特殊、個別的事情については、もちろん、そのように理解しないとイケない。たとえば、広島県の総合目録がまだまだ未整備であるからといって、それを一般的結論であるということとはできない。広島市の図書館の沿革を説明するときに、日本の戦後公共図書館史についての要約を参照したのも、個別事例と一般的要約を結びつけるためである。わが国においては、地方行政というものは、どこも似たりよったりであるとはいえ、差異がないということではない。例証するということは、特殊性を一般化するということではない。

(4) 組織の本質

国立情報学研究所の HP で典型的にみられることだが、初心者がその HP をみても、この組

組織がなにをする組織なのか、容易に理解できない。並んでいるアイコンだけみても、研究活動、大学院案内、情報サービス、イベント案内、研究所紹介、学術研究など多岐にわたる。このなかで、国立情報学研究所の特質を示すのは、情報サービスであること、そして、情報サービスの部分は、情報提供サービスと業務担当者向けサービスから構成されていて、後者のなかの目録所在情報サービスの部分こそその中核をなす部分であることは、事情に通じたひとでないと、とても理解できるようなものではない。この部分こそ書誌ユーティリティとしての性格を特徴づけているのだが、HPでは、わずか1～2行で片付けられているだけである（もちろん、ほかのサービスが無意味であるとか、将来国家的重要性をもつ事業に発展する可能性がないとかいっているのではない）。こうした点もまた、講師の説明によって補足される必要がある。

お わ り に

図書館情報学は、今後、情報および知識の社会的生産、流通、歴史、利用などの方向で、再編成されなければならないのではないかと、私自身は考えている。図書館の科学から、社会情報学とでもいったものに脱皮してゆく方向である。そのさい中心になるのは、実践的な技術、知識のつみかさねであろう。この技術、知識の進展を紹介し、解説し、意味合いを考察していくことが必要になる。今日の図書館情報学のテキストは、この点でやや時代遅れの側面をもっているものが多いといえるのではあるまいか。今後の改訂に期待したいところである。

注

- (1) 図書館法規基準総覧，武田英治・山本順一編，第2版，日本図書館協会，2002年刊，p. 88
- (2) 図書館概論，前島重方ほか編，樹村房，1998年，p. 42
- (3) 同，p. 4
- (4) 図書館資料論，平野英俊編，樹村房，1998年，p. 61 および 80
- (5) 図書館情報学ハンドブック，図書館情報学ハンドブック編集委員会編，第2版，1999年，p. 831

—平成 15 年 10 月 1 日 受理—